国際芥川龍之介学会 ISAS　第 4 回研究集会　印象記

松尾　清美(日本近代文学館・展示室受付)

第 4 回研究集会は、2023 年 3 月 5 日(日)13：30～16：30、神奈川近代文学館ホールにて、県立神奈川近代文学館、(公財)神奈川文学振興会との共催で開催された。

開催形式は会場での対面とオンライン会議システム Zoom による参加形式とが準備され、現地参加者には、バックヤードツアーと「文学の森へ　神奈川と作家たち展　第 2 部　芥川龍之介から中島敦まで　コーナー展示：夏目漱石特別コレクションから　－漱石あて絵はがきを中心に」の観覧という特典も用意されていた(事前申し込み制による先着 10 名)。開催 10 日前には、フライヤー配布の依頼メール(2 月 24 日(金))があり、当たり前のように準備のすべてを運営委員会に任せっきりだった受け身の姿勢から、意識がはっきりと変化した。所属館に設置依頼し、減った枚数を確認するのも楽しく、開催は待ち遠しかった。

当日の天候は曇りではあるものの少しは青空も見えていて、足下には水仙やタンポポ、霧笛橋脇の白木蓮は沢山の莟をつけていて、港の見える丘公園には、早春の風情が漂っていた。新型コロナウイルス流行後、初めての現地参加に心躍った。午前中の企画は、10：30 から会場のホールにて、文学館周辺に関するビデオ鑑賞があり、そのあとバックヤードツアーとして、普段は立ち入ることのできない書庫見学があった。「本の体裁はもとのままの体裁で保管する」という日本近代文学館の開館当初からの教えを、姉妹館でもある神奈川近代文学館は今もなお大切に守っている、というお話をうかがって嬉しく思った。

本はサイズが異なるため、1 冊 1 冊、透明のフィルムカバーを特注しているだけではなく、帯にまで薄葉紙のカバーを付けている本もあるとのことで驚いた。帯どころかカバーさえ外し、本を丸裸にした状態で貸し出しを行っている図書館も多く、違和感とともに借り手のこちらが気恥しくなることさえある。今回の見学で、手間暇かけた保管方法によって、本を大切に扱う神奈川近代文学館の姿勢を知ることができ、本の貸し出しは、借り手ばかりではなく、貸し手の問題でもあり、再度考え直すべき事柄であろうと改めて強く思った。

11：30 からは、神奈川ゆかりの作家たちの展示を各自ゆっくりと見学することができた。芥川関連の展示に関しては、個人的には北村初雄あて書簡(大正 7(1918)年 1 月 19 日/児玉寿子氏寄贈/神奈川近代文学館所蔵)を興味深く拝見させていただいた。封筒の表書きの角張った書体は、伊藤一郎氏のご研究にある芥川の六朝書体に該当するのではないかと思いながらしばし見入った。伊藤氏は、芥川の六朝書体は、「便りを貰う相手を楽しませるため」の書体という解釈をされている。この封筒の表書きの敬称は「様」ではなく「君」と書かれていることから、若年者宛ての例の一つと言えそうである。学会を通じて学んだことも、展示の鑑賞に役立った。漱石あて絵はがきのコーナー展示には、絵はがきは捨てずに保管していたとあったが、一枚一枚違う絵柄によって、漱石のために選んだ送り主それぞれの心遣いや、捨てずに保管していた漱石の気持ちを感じとることができ、楽しい展示であった。

◇研究発表　落合修平氏

「価値喪失と追憶　保吉物をめぐって」

落合修平氏によるご研究発表は、いわゆる保吉物(「保吉の手帳」(『改造』大正 12(1923)年 5 月)以降、作家自身をモデルとする堀川保吉が登場する作品群)に関する再評価であった。評価は総じて低かったという先行研究が、体調面による逃げといった観点からの評価であったことを丹念に示した上で、王朝物、切支丹物、開化物といった、緻密な構造でつくられてきた作品群の、既存の規範の解体、価値喪失の状況下において作風の転換があり、些細なるものの価値を発見する切実な営みとして、見出された価値として、日常のささやかな出来事の中にある幸福が追憶されているのが保吉物であるという新たな視点が示された。

丁寧でありながらすっきりとわかりやすい論理的な発表であった。質疑応答中の「今回保吉ものを読み返してすてきだなと思った。」という一言や、レジュメにある、「小さな幸福や価値がはっきりと映し出されるというのは、われわれの知るところではないかと思います。」といったさりげないコメントが印象的であり、発表に効果的に作用して引き込まれた。

保吉物は「反ロマン的傾向」を示しているとする久保田芳太郎氏の説を、保吉物とは何かを論証していく上で用いていた点については、ロマン的傾向が見えなければすなわち反ロマン的傾向があると言って良いのかどうか。しかしながら、久保田説を用いながら、個々の保吉物に当てはめていった結果、ロマン的な作品ではなく、ささいな事柄の中に幸福が見出され、追憶されている作品群であるという結論につながるので、さほど問題ではない。

○質疑応答

従来通り、発表 1 時間に対し、質疑応答は 30 分間設けられた。一つの目的に向かってとりこぼさないご発表(小澤純氏)、共感させていただきました(髙橋龍夫氏)、といった感想のほか、同時代言説との関わりについて(小澤氏)、保吉物は少年形成されつつある無垢な子供観への反発があるのではないか(金子佳高氏)、少年は無垢なものととらえるのは、センチメンタリズムだと言いながらそこへ入る、それが芥川のセンチメンタリズム(小谷瑛輔氏)、保吉物というと私小説風と捉えられてしまい、個人的な記憶を辿っているように一見みえるが、そうではなくて主張したいことは計画的に計算されて作られていて、ささいなことや、無名な人、労働者や民衆も意識しながら光を当てていき、保吉の階級問題も取り上げられ、晩年に向かって芥川の作風につながっていくのではないか(髙橋氏)、ささやかなものに目を向けることは、女性描写にもいく。芥川の女性描写について流れが重なり、「文藝的な的な、あまりに文藝的な」にある「話らしい話のない小説」のポイントは、詩的精神の話、芥川の小説のモチーフはどうとらえられていたか、詩的精神とは抒情詩、ある種の情緒、追憶などいろいろなものがあり、ものすごく詩的なものなのではないか(太田幸夫氏)、保吉ものと「侏儒の言葉」との関連について、永遠を超えた理想世界、永遠を超えようとする高い理想に執着しなければならない「戦い」、ささいなものに価値を認めようとする晩年の展望(五島慶一氏)、といった質問や意見が多く寄せられた。

◇研究集会運営委員会企画「研究を聞く」　石割透氏
「芥川龍之介あれこれ」

石割透氏によるご講演は、芥川作品に関するルビ、校正、原稿発表枚数の大体、収入、発表雑誌について、具体的な資料を提示しながら問題提起をしていく、興味深い内容であった。

ルビ問題は、ルビなしの場合にはどう読んだら良いのか、ルビがある場合には誰が振ったのかという問題があり、ルビに関しては、大変重要でありながら、判断が難しく悩ましい問題であり、よくぞ取り上げてくださったと思った。たえず多角的に検討せねばならない問題である。校正問題は、出版社による校正と本人による校正とがあり、真を見極めなくてはならないという点で、同じく重要な問題である。収入問題では、芥川が経済的に苦しかったのか芥川家としてはどうであったのかが問題提起され、判断に関してはわからないことが多いだけに、熟考する必要の大切さを改めて認識した。発表原稿の枚数や小説の本数、発表雑誌についても具体的数値で示され、作品の解釈をしていく上で、背景としてどういう状況にあったかを把握することができる好資料であった。今後も手元に置いて参照していきたい。

○質疑応答

「西方の人」のルビは総ルビであり、編集者が付けたのではないだろうか。天上に昇る梯子だから「せいほう」。おもしろい。思うことが多かった。数字を見せられると、説得力がある(宮坂覺氏)、ルビ問題に関して、家庭(芥川家)ではこう言っていた、周辺ではどう読んでいるかという問題も出てくる(庄司達也氏)、普段意識していなかった重要な側面、収入のこと、生活はやはり苦しかったのかを実感した。そのほか芥川の温泉地における原稿執筆についての情報(髙橋龍夫氏)、家自体は裕福だったのではないか。中流下層階級虚構だったのではないか。芥川、親に隠れて表出。ずれがあるのではないか。帝国ホテルは宿泊費をとっていない。自己演出もある。実際の収入のあり方、家の問題としてある。作家表出があるのではないか(小澤純氏)、芥川に作家イメージ表象があり、創作者芥川龍之介は中流下層階級であって、ブルジョアではない(石割氏)、芥川は貧しい。養育費は新原家に入っていたか。それほど貧しくない(宮坂氏)、家は裕福だった。個人経済的に苦しい。きつかったのではないか。家族を養えなくなって、全集の刊行をあてにして死んだ。印税どれくらいあてこんでいたのか(小谷瑛輔氏)、原稿料の増加や印税に関する情報（松本常彦氏)、といった芥川の経済状況の実相に迫ろうとする意見が出され、さまざまな角度からの検討がなされた。

閉会時刻には雨が降っていて、靄が立ち籠め、山手の丘は暮れ方の静かな雰囲気に包まれていた。芥川の作品にもゆかりあるこの地で、優雅で知的な 1 日を過ごせて満足であった。

末尾になるが、県立神奈川近代文学館と振興会の皆様ならびに第 4 回研究集会の開催にご尽力された方々に、深く感謝申し上げたい。